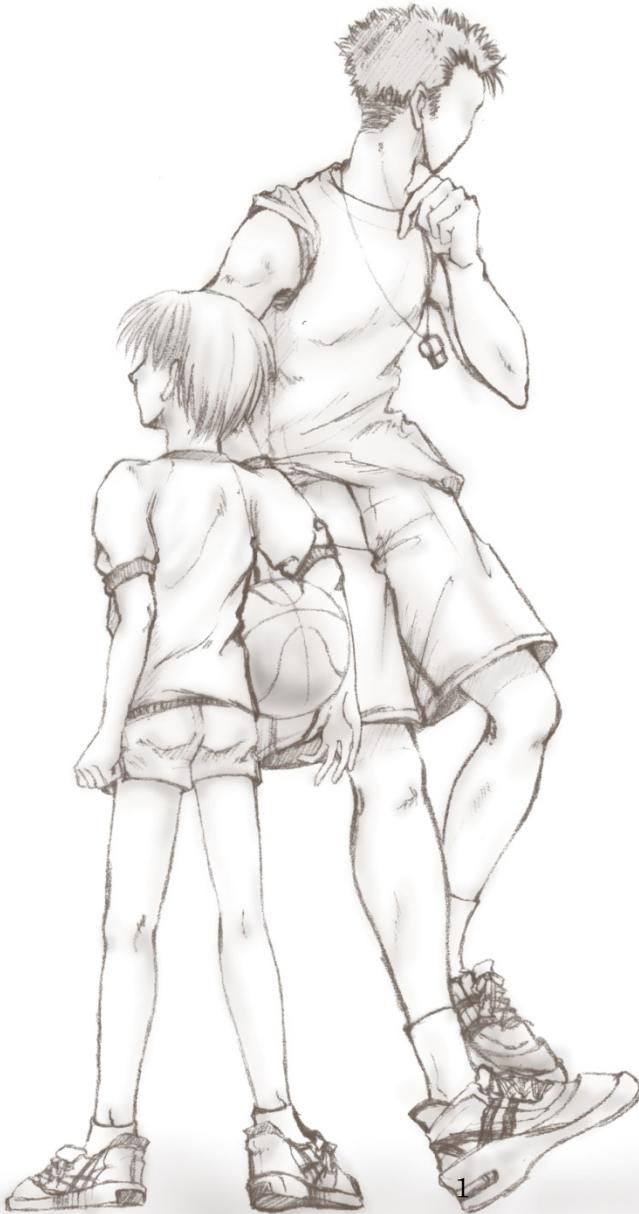


みやこ



※体験版は第1・3・6章の抜粋です。

1

幼い頃から「まるで男の子みたいね」と言われ続けてきたぼくが、始めてお株を奪われた相手。それが三夜子<sup>みやこ</sup>だった。

「男の子みたい」とは言われていても、半ズボンから華奢な白い足を覗かせていたぼくと違って、彼女はすらりと伸びた細いながらも筋肉質な手足と、それに似合う褐色の肌を見せ付けるように襟足を深く刈り込んだうなじを逸らせて、堂々と教壇の前に立っていた。「今日から皆さんと一緒に勉強する事になった竹下<sup>たけした</sup>三夜子<sup>みやこ</sup>さんです。仲良くしてあげ

て下さいね」

型どおりの先生の紹介が終わり、僕の隣の空席に促されて三夜子が歩き出すと、前の席を陣取っている性質<sup>たち</sup>の悪い連中が、早速『洗礼』とばかりに囃し立て始めた。

「何だ、アレ？『みやこ』って、女？」

「背中見ろよ！鞆、赤背負ってんぞ！」

「うえ、オカマみて、ありえねえ」

ぼく同様言われ慣れているのか、三夜子は全くそれらが聞こえていないかのように、こちらを見向きもせず背筋を伸ばしたまま空席に腰掛け「よろしくね」と、ぼくに向かってにつこり微笑みかけた。

「よろしくね、だつてさ。気持ち悪いい」  
無視されたのが気に入らなかつたのか、連中は尚も囃し続ける。

「成瀬<sup>なるせ</sup>と並んで W オカマだな」

予想はしていたが、とうとう話題がぼくにまで及んだので、思わず身を固くした。慣れている（と思う。多分。）とはいえ転校早々の不安な時に囃したてられるのは、やはり気分のいいものでは無いだろうし、ぼくみたいなのが傍にいたせいで妙なあだ名まで付けられそうになっている。

きつと彼女は転校第一歩目の失敗に気付いて後悔している事だろう。折角声をかけてくれたのに：と彼女を横目で覗き見ると、案の定、先程の笑顔とは打って変わって鬼のような形相でこちらを睨んでいる。

「成瀬って、あんた？」

恐る恐る頷くと、彼女はぼくの席——の前にある、連中のリーダー的存在である奴の机を勢い良く蹴り飛ばした。

「よりにもよって、か弱い女の子をオカマ呼ばわりするなんて、どういうつもりだよ!?! 女相手に陰口叩いて面白がって、お前こそホン

トにち○こついでんのか!?!」

響き渡る啖呵に教室は一瞬静まり返った。だが直後に爆笑の渦と共に「女ー!」「女ー!」という大合唱が巻き起こる。慌てた先生の「静かにしなさい!」という叫び声も、途切れ途切れに虚しく響くばかりだった。

彼女は顔を真っ赤にして、それでも机の持ち主を睨みながら必死に喧騒の理由を探っているようだった。ぼくは真相を語ろうと彼女の前に進み出たが、そのまま彼女に右腕を掴まれ背中に追いやられてしまった。

「いいんだよ。あんたは女の子なんだから引つ込んでな! 売られた喧嘩は自分で買っよ!」

それを聞いたクラスメイトは更に笑声をあげ、彼女は益々眉を吊り上げて周囲を睨みつけた。無理矢理先生が間に入ってその場は何とか納まったが、三夜子には結局『おとこおんな』の烙印が押され、ぼくの右腕には一週

間ほど、本当は小さく震えていた早とちりなヒーローの爪の痕が残った。

三年の月日が経って、背中に貼り付いていた色別の鞆が男女共通の学生鞆に変わっても、相変わらずぼくのヒーローは三夜子だった。三夜子は穿きなれないスカートに眉根を寄せながら、胸元のスカートに悪戦苦闘している。きつとコレが毎日の日課になるんだろう。なと予感しながら、ぼくは彼女のスカートを手に取った。

「これから入学式なんだから、ちゃんとしな  
いと駄目だよ、三夜ちゃん」

そんなぼくの言葉を面倒くさそうに聞きながら、素直に結ばれていくスカートを見つめ

る三夜子の視線を感じて掌が熱くなる。

あんな最悪な出会いだったのにもかかわらず、三夜子はぼくの存在を煙たがる事無く、むしろずつと護ってくれていた。粗雑で喧嘩っ早いのは生まれつきらしく、傍にいますおかげでいらぬ争いに巻き込まれる事もあつたけど、彼女の正義はぼくにとっては心地良かったし、憧れだった。そんな事言ったら彼女はきつと気持ち悪がるだろうけど。

「——はい、出来たよ」

「サンキュ。じゃ、早くクラス分け見に行こうぜ、優有！」

にっこり笑うと、前も見ないで掲示板のある中庭に向かって走り出す。相変わらずだなあ、と苦笑しながら彼女の背中を目で追うと、左端に嫌な奴らの姿が見えた。

「おい、見ろよ。オカマがスカート穿いてやがるぜ」

「ホントだ。制服間違ってるぞー！」

「おとこおーんーな、オカマが二人ー!!」

『二人』の単語に反応した三夜子の身体がからだ急激に左へ加速していく。とても追いつける速さじゃない。

「三夜ちゃ………!!」

瞬間 三夜子が飛び膝蹴りの体制に入った。その

「こら!!!」

地面が揺れるような大音響と共に、スポーツウェアを着た大柄な男の人が現れた。先生だろうか、かなり若い印象を受ける。

「そんなところで何、遊んでんだ！クラス分け確認したら、さつさと教室へ移動！」

頭一つ上の高さから大声で怒鳴られて、さすがの奴らも萎縮したらしい。何か口のごによごによごに言いながらも足早に去って行った。

「大丈夫？三夜ちゃん」

「——お前なあ！」

ようやく追いついたばくに向かって叫んだのは三夜子ではなかった。近くで見ると本当に大きい。2メートル近くはありそうな身体からだには、思った以上の筋肉が形良く配置されていて、そこから大きな瞳ひとみと白い歯がこちらを狙っているかのように浮き上がって見える。逃げ出した奴ら以上に萎縮したばくは、その場で固まってしまった。

「大の男が女に護られてんじゃねーよ、みっともねー！」

一瞬、意味が分からなかった。今までぼくは「まるで男の子みたい」と言われた事はあっても、「男」と断定された事はなかったからだ。

「あの…、何で分かったんですか…？」  
恐れも忘れて聞いていた。

「あ？だつてお前、明らかに女の方が手エ出  
そうとしてたじゃねーか」

「いえ、そうじゃなくて、あの……、ぼく、  
男に見えますか？」

「……じゃあ、何か？おめーは入学早々男装  
して登校するようなファンキーなヤローだつ  
てのか？」

「あ。………。そか」

彼女がセーラー服ならばくは学ランだ。当  
たり前の事なのに、今まで『男の子みたい  
な女の子』と言われ続け過ぎていたせいで、  
気が付かなかつた。

「…それによ、お前、別に言うほど女には見  
えねーぜ？」

「え？」

そんなの始めて言われた。思わず三夜子に  
視線を向けると、彼女は男の口が動くのを苦  
虫を噛み潰すように見ている。

「ま、とりあえず放課後は体育館のゴール下

に集合な」

「はい？」

「いつまでも彼女の後ろに隠れて震えてる彼  
氏じゃかっこつかねーだろ？俺が鍛え直して  
やるよ」

「ええ？——いや…」

結構です。と丁重にお断りしようとした時、  
三夜子がぼくの身体を引つ張り、前へ進み出  
た。

「行きます！」

「いや、お嬢ちゃんに來られてもしょうがな  
いんだけど」

「行・き・ま・す!!」

どうやら『お嬢ちゃん』扱いが、完全に三  
夜子に火をつけてしまったらしい。こうなつ  
た三夜子は誰にも止められない。いや、止め  
なきや何を仕出かすか分からない。もう観念  
するしかなかった。

「…分かりました。放課後伺います」

「待ってるぜ」

そう言うのと、やっと男性は帰って行った。

「……何なの？アイツ。むかつく……」

「三夜ちゃん……」

「優有、あんたは手エ出さなくていいよ。あたしが売られた喧嘩だからね」

「三夜ちゃん、それ多分違う……」

「絶つつつ、対！ぎやふんと言わせてやる！！」  
「ぎやふんて……」

その時ぼくは怒りに身を震わせる三夜子を宥めるのに必死で、静かに進行しだした違和感に気付いていなかった。思えばこれが、ずっと他人の為に正義を貫いてきた彼女が始めて見せた私怨だったのだ。

青空だ。ぼくはこの一週間、毎日青空を眺めて過ごしている。込み上げる胃酸を押さえながら――

「大丈夫？」

青空を切るようにして三夜子がぼくの顔を覗き込んできた。

「優有、あんた体力無い無いとは思ってたけど、まさかここまでとは思わなかった。こんなんで本当にあたしに勝てると思ってるの？」  
勝手にライバルに担ぎあげられてからとい

うもの、三夜子は少しぼくに冷たくなった気がする。

「――とにかく、これで入部決定だな、ユウ」

あの日、彼にそう言われた時にはさすがに嵌められたんじゃないかと思った。しかし三夜子がやる気になっている以上、ぼくに選択の余地はない。

「……分かりました。根っからの運動音痴なんで期待に添えるか分かりませんが、これから宜しく願います、先生」

そう言ってお辞儀をすると、それ以上に彼の頭ががくりと下がった。

「な、何です？」

「俺………、そんなフケて見えつかないか？」

「え？」

確かに教師にしては若く見えるが、同じ学校の生徒にはとても見えない。大体着ているウェアがこの生徒の物ではなかった。

「草先輩はウチのOBで、大学に通う傍ら練習を時々見に来てくれているんだよ」

部長と思われる3年生の先輩がフオーローに入ってくれた。

「あ……、すみません」

「いや、どっちにしろお前くらい奴らにや、俺らは全部おっさんに見えんだろうかな」

「オッサン」

「三夜ちゃん！」

「当然あたしも入るよ。勝負の相手とは言え、あんたが優有に何するか信用できないからね。監視させてもらう」

「そりや無理な相談だな」

「何で」

「さっき言つたる？ここは『男子』バスケットだ。女子は隣のコート」

それを聞いた三夜子の片眉がびくりと上がる。

「あたしは玉遊びがしたい訳じゃねえんだよ、オッサン。大体それじゃ『監視』にならねえだろ？勝負内容だって、要は振りほどけりゃいいんだし、バスケットは関係ない筈だ」

「あー、まあそうだなあ。でもそーいう問題じゃないんだよな」

そういう切り返しをされるとは思っていなかったらしい。うーん、と腕組みをしたまま天井を見上げた彼に「マネージャーならどうでしょう？」と、それまで事の成り行きを見守っていた先輩が声をかけた。

「マネージャー、ねえ。どう見てもそういうのが得意そうなタイプには見えないけど……」

「それでいい」



しまったばくは、何事も基本は体力だからと言われ、入部以来こうして毎日外ばかり走らされる日々だ。いや、実際には新入部員といえどもボールに触れる練習はあるんだけど、今まで運動らしい運動をした事がなかったばくは、最初のマラソンやダッシュといった基礎トレーニングにも全くついていけない状況で、途中で倒れてはまた最初からやり直し、という無限ループに落ちていた。

「はいこれ、ボール。あんた倒れてる間、暇でしょ？寝てる隙にボールくらい掴めるようになっとけってさ。あんにやろうが」

ぼんやりと聞きながらボールを受け取り地面に置く。よく理由は分からないが、バスケットボールというのは片手で掴めないといかないらしく、これが結構難しい。ぼくは身体を土手に預けるようにして座り直すと、乱れた息を整えながら右手に意識を集中した。

「草先輩、今日来てるんだ」

「あいつの名前なんか口にすんな！」

「や、でも……」

「何なの？あいつ。めったに来ないうえに、たまに来たかと思っても優秀のこと外にほったらかしで全く見やしない。勝負なめてんのか？」

「でもほら、あの人、大学生だし……」

「とにかく！復活したらまた最初から！サボんなよ!!」

そう言い捨てる、三夜子は忙しそうに他のバスケット部員のいる体育館の方へ走って行ってしまった。

あの日以来、三夜子は草先輩に対して敵対心をますます燃やすばかりだ。まあ、そのせいでぼくにもとぼつちりが来ている訳だけれど。

それでも彼女は『約束』を果たすべく、マ

ネージャーとしての職務をこなす傍ら、ああやって理由をつけては、ぼくの様子を見に来ている。『監視』などとは言っているが、入部してから殆ど外の練習にばかりあけて、他の部員達のような練習に進められているぼくに対して、自責の念があるのかもしれない。

「よう。調子はどうだ？」

気が付くと青空に草先輩の顔が浮かんでいた。改めて下から見ると、この人本当に背が高い。雲の中に顔が入ってるみたいだ。

「……お疲れ様です。どうしたんですか？」  
「どうした、はご挨拶だなあ。さつきミヤちゃんに『たまにしか来ないんだから、きつち

り選手管理していけ』って、体育館蹴り出されたんだよ。それで可愛いバスケット部屈指の秘蔵っ子を眺めにだな……、ま、要はサボりだ」  
そう言うと草先輩はぼくの隣に腰掛けて、いつものように顎をひと撫でした。

「名前で呼ぶと、また三夜ちゃんに蹴られますよ」

「ああ、ありやとんだお転婆だ。だまってニッコリしてりやあ、そこそこイケんのに」

「すいません」

「別にお前が謝るこっちゃやねーよ」

「先輩：本当は三夜ちゃんと勝負する気なんてないでしょう？」

一度ちゃんと聞いてみたかった。入学式の日、草先輩はただぼくに入部の勧誘をしたかっただけで、三夜子の事など眼中になかった筈だ。なのに何故なぜこんな茶番に付き合っているんだろう。

「ま、実際戦うのはお前だしな」

「そうですけど…」

「別に悪い話じゃないと思うぜ。前にも言ったが、お前だつていつまでも彼女の後ろに隠れて震えてる彼氏じゃかっこつかねーだろ？男あげるチャンスじゃねーか」

「言っときますけど、あの…別に彼女とかじゃないですから」

「そんなの見りや分かるよ。でも惚れてる女つて事に代わりはねーだろ？」

「馬鹿言わないで下さい！ぼくにとつて彼女はヒーローつて言うか、憧れみたいなもので…」

「ほー」

「ずっと、いつも助けて貰ってたんです。常に他人の為に戦ってくれるような娘で…。普段は自分の事で怒るような人じゃないんです」  
「じゃあユウがピンチの時は、いつつもミヤちゃんが来て助けてくれる、つて訳だ。いじ

らしーね」

そう言うと、草先輩は急に立ち上がってぼくの後ろに回り込んで両脇に腕を差し入れ、そのまま羽交い絞めの状態で持ち上げた。つま先が完全に宙に浮いている。

「な、何するんですか!？」

自分の重力で肩が軋む。恐怖を感じたぼくは必死で暴れたが、がっちり食い込んだ長い腕はピクリとも動かなかった。

「悪役登場!!」

「ちよ、ふざけてないで離して下さいよ!」

「ミヤちゃん相手にだつて、このぐらいすぐ出来るようになるんだぜ?」

悪役ぶっているつもりなのか、耳元で低音で囁かれる。上唇が耳に当たるのが気になつて仕方がない。

「ぼくはそんな事しません!!」

「他のヤローがだよ、馬鹿」

脳天を打たれた。そんな事、考えた事もなかった。

「俺、今身長いくつあると思う？」

暴れなくなったのを確認してやつと地面に降ろされたぼくは、改めて草先輩を見上げた。さつきのせいで少し首がきしきしして痛い。

「190…くらいですか？」

「194。それでもお前らの頃は150丁度しかなかった」

「150!?まさか！ぼくと2cmしか違わないですよ？」

「ミヤちゃんと並んだら、俺のが低かったらうな」

「信じられない…」

「1年間で10cm以上は伸びてたからな。卒業する頃には、もう今とそんなに身長変わらん

なかった。——つまりな」

大きな手が天から降って来た。と同時に、しゃがんだ草先輩の顔が目の前に近づく。

からだ  
身体が大きいせいか瞳も大きい気がする。至近距離で見つめられると、少し怖い。

「本当はこんな練習、意味ないんだ」

「え？」

「ま、俺としちゃー将来有望な若者ひとり上手いことゲツトして丸儲けだと思ってたけど、お前アホみたいに真面目だからな。タネ明かしだ」

「それじゃ…!でもだって、ぼくじゃ、三夜ちゃんには適わないし…」

「いつちよ前に勝つ気じゃねーか」

「そうじゃなくて!…ぼくが一生懸命やらなかったら三夜ちゃんが…」

と、台詞を遮るように草先輩は、ぼくの頭

の上に置いていた右手を広げて顔の前に差し出した。

「どう思う？」

「どう……って、大きいですね」

こんなに背の高い人に出会った事が無いから良く分からないけど、身長を差し引いてもかなり大きいと思う。ごつごつはしていないが、それでもぼくの手よりはがっしりしている指も長い。力強い手だ。

思わず見つめた貧弱な自分の手を、草先輩は指を絡めるようにぎゅっと握ってきた。大きいうえに、厚い。その手の向こうの視線の鋭さに、掌の熱が伝わってしまいそうで恥ずかしい。

「せ、先輩。……近いです」

「前から思ってたけど、お前、臆病者の癖に口だけは達者だよなあ」

さすがにカチンときて手を振り解ほどこうとし

たが、先輩の手はがっちり絡まって解ほどけない。顔が火照るのが自分でも分かって、瞳めを逸らして唇を噛むと、先輩の手に更に力が入った。

「痛っ」

「この形、良く覚えとけよ」

素晴らしい残すと、手を解ほどいた先輩はボールを片手でひよいと掴んで体育館に戻って行ってしまった。

——本当はこんな練習、意味ないんだ——

意味は無いつてどう言う事だろう。意味が

無いなら何故<sup>なぜ</sup>ぼくはこんな事してるんだ？  
走っても走ってもあの人の唇が、声が、耳  
に触れているようで気分が悪い。手も頭も心  
臓も、全てが痛くて、ただただ走った。

その日、ぼくはやつと一度も倒れる事無く  
外のメニューをこなす事が出来たけど、気分  
は最悪だった。

ふいに視界が明るくなって目が覚めた。冷やしている間に眠ってしまったらしい。顔を上げると、草先輩がタオルと氷嚢を持ち上げて枕元に立っていた。

「お前、冷やしたら帰れって言っといたる？  
電気が付いてたから気が付いたものの、このまま夜明かしする気か!？」

「……すみません」

少し寝て落ち着いたせいとか、素直に謝罪の言葉が出た。窓を見るとすっかり日が暮れている。今の季節を考えると、ゆうに7時は超えている筈だ。

「部活……終わったんですか？」  
「ああ、もうみんな帰った。部室棟も閉まっちゃいから荷物預かってきたぞ」  
という事は今は8時くらいか。

草先輩は「ちよつと見せてみる」と言うと、ぼくの顔を持ち上げ、右の脛の上辺りを指でそつと押さえた。急に外気にあたった頬は、眠っている間冷やしっ放しになっていたせいもあって、触れられているという風にはあまり感じない。ただそこから、すうつと気が抜けていくような妙な感覚がした。

「多分平気だと思うけど、明日は少し腫れるかもしれないな。家に帰ってもちゃんと冷やしとけよ」

「三夜ちゃんは……?」

「大丈夫。大した事無かった。今日は家に帰したけど、明日また部活に来るってさ」  
「そう……ですか」

無事だった事は素直に良かったと思える。でも、もう部活には顔を出したくない。いつまでこんな事を続けていればいいのか。暗い表情のぼくを覗き込んで、草先輩は急に真面目な顔になった。

「お前は端からバスケの為に入部したんじゃない。それは知ってる。でもな、やるときは真剣にやれ。集中してなきや今回みたいな怪我もあるだろうし、真面目にバスケに取り組んでる奴らに迷惑だ」

「はい……」  
本当に、その通りだ。

「どうした。やけに素直じゃねえか」  
「……………正直、どうしたらいいか分からないんです。これ以上、部活続けてても何も変わらない……」

ぼくはただ三夜子と一緒に楽しく毎日を過ごしていらればそれで良かったのに。ここ

にいると悪い方へ転がるばかりのような気がする。三夜子はぼくに冷たくなったし、ぼくの知らない顔や仕草をするようになった。

膝を抱えたぼくを見て、草先輩は「お前は妙に真面目だからな」と笑った。

「実際、考え過ぎなんじゃねえのか？ 所詮恋愛なんて、いいなーって思ったらアプローチして『好きだ』つつって、上手い事いたらセックスしてって、極単純な事だと思っぜ、俺は」

「セツ……って、先輩」

からかわれてるんだらうか？ 言葉に詰まる。

「何だよ。何だかんだ言っつて、お前だつてミヤちゃんオカズにしたりすんだろ？」

「オカ……っ！ し、しませんよ、そんな事っつ！！」

何考えてんだ、この人は！ 驚いて、赤くなりながらも否定すると、草先輩は「んんんんんん？」と首を傾げるようにしてぼくの顔を

覗き込んできた。

「しないって、どっち？」

「え？ど、どっち？……って……」

「お前、今身長何cmだっけ？」

「は、計った時は148……」

草先輩の両腕がぼくの身体からだを挟むようにベツトに置かれた。顔が近過ぎる。怖い。ぼくは咄嗟に先輩の身体からだと反対の方に顔を背けた。瞬間、ふわりと身体からだが持ち上げられて反転するように先輩の方に引き寄せられる。

「そ、草先輩？」

「そんな訳ねえと思うんだけどな」

ぼくの位置はちょうど90度回転してベツトに対して垂直になり、横に立っていた草先輩の身体からだに背中からすっぽり収まるような形になった。

草先輩は、ぼくが不審に思う間も与えず、

いきなり体操服の短パンの上からぼくの股間を勢い良く握り締めた。

「!!!!」

声にならない叫びが喉に詰まる。

「もう一回計ってみろよ。大分大きくなってると思うぜ」

そう言いつつ、草先輩はぼくの股間をぎゅつと握っては放すといった動作を繰り返す。

あまりの痛さにぼくの身体からだは自然と前屈みになったが、彼の長い手はそんなガードをものともしなかった。

「なっ、……っにするっ……っ、っすかっっ」

途切れ途切れに、それでもやっつと声にする。

何とか外そうと腕を掴んだが、強引且つリズムカルな動きに身体からだの機能が上手く働かない。必死で他に何か掴もうとベッドに手を這わす。

「奥の方がじんじんして来ねえ？」

「何……っガ……っ!!」

始めて味わう感覚に思考が追いつかない。目の前がチカチカする。辛い。息が上手く吸えなくて苦しい。奥が……？奥が、どうしたって？

「~~~~~~~~っつ、つあっつ……!」

「あ……、こりやあ、本当に……!」

耳元で話すなよ!息が、唇が……当たる!!

「カ……ふ、あっつ……!」

気持ち悪い。息が上がって言葉が出ない。

「あ……く、は……ああっつ、……ふっ、

……くん……んふううんん!」

ビリビリする!声が……声がおかしいよっ

っ!!

草先輩が背中からぼくの上に押し掛かって、まるで自分の意思通りに動かない身体からだに翻弄される。

ただ単純に強く握られて痛くてたまらない

のに、力を抜かれる毎に震える程の痺れが上がつてくるのが自分でも分かる。痛くて苦しいのに、脳に霞がかかったみたいに血が昇って……。ぼくは壊れた人形のように首を左右に振るのが精一杯で、やつと掴んだ枕も振り回せず握り締めてしまった。

「あ……はっ!も……っつ、つや……っつ

……!!」

苦しくて苦しくて、涙も涎もみつともなく下に流れて太腿を濡らしているが止められない。どうしてぼくはこの人に何一つ適われないんだろう?悔しいのに顔を上げる事が出来ない。こんな辱めを受けて、どうして抵抗できないんだ!言葉すら、ろくに出来ないなんて……。

「あ……なんか、マジでヤベェかも……!」

草先輩がボソリと呟いた。そんな台詞ですら、いつもと違って耳から直接お腹の中に響いてくるみたいで、全身が勝手にビクビクと

反応する。

ヤバいつて何が!? 恥ずかしい。嫌だ。嫌なのに、草先輩の息遣いが耳元で反響して紅潮する。怖い。嫌だ! 震える…恥ずかしい。

と、草先輩の唇がぼくの耳を挟んで間から熱い物がするりと滑った。

「ひ!」

無作法に耳で蠢くそれ自体は火傷するかと思う程の熱を帯びているくせに、辿った跡を湿った吐息がかかる度に急速に熱を奪う。

同時に握るだけだった右手が、優しく擦るような動きに変化して、無理矢理与えられる未知の感覚に、堪らず腰が跳ね上がった。

「つふ、あ、ああ、あ……!!!」

上半身を締め付けていた左手も、腹から胸へするすると這い上がる。突起に触れられて、何か大きなうねりのような物が、ぼくの感覚を急激に貫いた。

「くうん、ふあつ、あつ、あはあああ!!」

つああ、ああああつ!!!」

全てが体感した事のない痛みだった。気が付いたら大声を上げて、背中を大きく仰け反らせ、草先輩に身体からだを全て預けて果てていた。

回された腕に必死でしがみ付いて、息も心臓も大きく乱れ、顔も短パンもたらしなく汚れているのに実感が沸かない。何でぼくはこんな事になっているんだ。

しばらく草先輩はぼくを抱えて少し辛そうに息を整えていたけど、汚れたぼくの短パンを見ると頭を掻いて、ベッドに半分腰掛けると、下着ごと短パンを脱がしにかかった。

「や…、つつは!」

丁寧な動きだったが擦れた刺激でまた反応してしまった。そこでやつと、これが異常な事態だと脳が認識した。

「あ……スマン」

「……ふう、う……!!」

謝られて、また涙が溢れた。何で？何でこの人はこんな事……！言いたい事はたくさんある筈なのに、頭の中が黒いペンでぐちゃぐちゃに塗りつぶされたようになって、どうしていいか分からない。

草先輩は黙ってぼくの汚れた衣服を保健室に備え付けの水道で洗っている。その後ろ姿を見て、制服に着替えてなくて良かった、なんてとこだけ妙に冷静に思う。

「……ほら」

草先輩が洗い終わった衣服を返して来た。体操服の短パンと、中のパンツ——改めて信じられない光景に、頭の後ろがガンガンする。

「……これ、持って帰るんですよね……？」  
しかも帰る時にはノーパンじゃないか。

「あ……、悪かったよ。こんなつもりじゃ無かったんだ」

「こんな……、こんなつもりって……!!」

ふつふつと、怒りが込み上げる。

「最初はちょっと様子みて止めるつもりだったんだ。けどお前、反応がカワイイっていうか、いちいち新鮮なもんでついなー。最後まで付き合っちゃまった」

「つい？付き合った??そんな言い方、まるでぼくのせいみたいじゃないか!!」

「あなたは大人だから!!」

苦しい、悔しい。身体からだの震えが止まらない。

「大人だから、こんな事で済ませられるかもしれないけど！だけど、ぼくは……!!」

本当に、本当に初めてだった。あんな苦し

みも、痛みも、衝動も……!!

草先輩は一瞬瞳を大きくしてこちらを見ていたが、やがて黙って2, 3度顎を搔くと『本当におすすめなかった』ときちんと頭を下げた。そんな態度は、ずるい。反射的にぼくは草先輩の頬に拳を叩きつけた。

「あんた………最低だ!!」

そこからは怒りで良く覚えていない。とにかく制服に着替えて学校を飛び出した。簡単にぼくの力なんて捻じ伏せられるくせに、あの人は計画性のないぼくの拳を正面から受けて後ろによるめいた。：贖罪のつもりか。ふ

ざけるな!

家までの距離がとても長く感じられた。追ってくるんじゃないかと恐怖でいっぱいだった。

家に帰るとベッドに潜り込んで布団を被り、小さくなつて震えて泣いた。それが怒りなのか恐怖なのか自分でも分からない。分からない事だらけだ。もう何もしたくない。誰にも会いたくなかった。

\*\*\* Read Me \*\*\*

この度はサークル「まえぜん」処女作『みやこ』体験版をお手に取って下さいまして、誠にありがとうございます。

この作品は全 10 章で構成されておりますが、その中の第1・第3・第6章を体験版として掲載させていただきました。

今回初めてのDL頒布も行うという事で、不慣れな点多々あると思いますが、この作品が少しでも皆様の心に残るものになれば幸いです。

では、また本編でお会いできる事を願って。

2007.07 月 hime.

\*\*\* \*\*

(近日公開いたします。よろしく願いいたします)

まえぜん —まえがたつからぜんりつせん—

<http://kuritorisu.sakura.ne.jp/maezen>